

氏名	西 毅徳
ヨミガナ	ニシ タカトク
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第671号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 光が織りなす現象と空気感－Phenomena of Light and Atmosphere－ 〈作品〉 Ripple 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	鈴木 太朗
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	藤崎 圭一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	橋本 和幸
（副査）		ライティン	（）	内原 智史
		グデザイナ		
		ー		
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私が行なっている表現は“光の空間”の創造である。私の考える“光の空間”とは、“空気感”、“光学現象”、そして“見立て”という3つの要素から成り立っている。“空気感”とは、スイスの建築家であるPeter Zumthor（ピーター・ズントー）が、人の心に触れる建築を創造するために必要だと考える彼の建築理念の一つにある概念である。私はズントーの提唱する“空気感”とは、人間が建築空間を体験することで、過去の記憶を思い起こす起爆剤になるものだと定義し、自身の創造の源としている自然の光景を、空間体験から想起させる要素と見出した。

想起させる光景は、第2の要素である“光学現象”に繋がっている。私は作品空間の着想を、自然の光景から得ている。例えば、雲の間から洩れる光の「天使の梯子」や、木々の隙間に光が見える「木漏れ日」、月夜の海に現れる「月の道」といったものである。これらは大気の空気や水などの媒質が、太陽や月光の反射や屈折といった性質によって、生まれる“光学現象”である。この光の性質を操ることで、私は別の素材を扱って、自然の光景を再構成することができると考えた。

“空気感”の持つ建築空間と、“光学現象”による光を繋ぐのが、3つ目の“見立て”の要素である。これは、日本庭園の手法が基になっている。例えば、白砂利を使うことで水のある光景を思い描かせてくれる「枯山水」が正にそうである。この想像性による光景への変換が、私の作品表現にとって重要となる。これら3つの要素によって作られた空間は、自然界では体験できないが、どこか自然の光景を想起させる、そんな新たな光景になると確信している。

本論文では、第1の要素“空気感”の研究として、ズントーの設計したドイツに所在する《聖コロンバ教会ケルン大司教美術館》と《ブラザー・クラウド野外礼拝堂》を実際に訪れ、空気感とはどのように生み出されるのか、照度計による空間の計測、建築素材の質感、色味、太陽と風の影響と時間による空間の変化、また温度をもとに調査を行なった。

第2の要素の研究では、私の作品原動力となる自然の光景を研究するために、光の国と呼ばれるオランダや、地中海に浮かぶ島国であるマルタ共和国などを重点に巡り、太陽と環境の変化による光景の違いを調査した。各国の年間日照時間・雨量・湿度・気温の違いを割り出してみると、それらの環境の違いが光景に強く影響を及ぼしていることが判明した。ここから導かれるのが、媒質と光源の状態によって光景が大きく変化するということであり、これが“光学現象”に繋がるのである。私は、自然の光景を形成する“光学現象”を見つけ、光を操作することで新たな光景へと再構築できることを見出した。

また、第3の要素の日本庭園にある“見立て”の手法を、文献『作庭記』を引用することや、実際に庭園や茶室を体験、関係者からの話を聞くことで、庭園の見立てには、空間全体が物語のある想像性が含まれていることだと理解した。

そして自身の過去作品である《明暗境界線》、《MIRAGE CUBE》、《SKY PATH》、《Shape of Light》、《CHOPPY SIGHT》の5点を振り返ることで、上記の3要素からなる光の空間の表現の可能性を探り出した。

博士審査出展作品《Ripple》では、雨の日の光景にある水の波紋を、太陽光と風の動きを使いアクリルパイプが生じさせる光学現象によって再構築した。また、この現象を見て波紋を想起させるような空気感を意識した建築空間を設計することで、建築空間と現象が作り出す新たな光景の知見が得られ、3つの要素による“光の空間”が証明された。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、光と空間との関係性をヨーロッパへの実地調査を基に考察した上で、著者がアーティスト／デザイナーとして制作する空間表現について論じたものである。光と空間の関係を光学的なアプローチを主軸として分析し、光学現象が呼び起こす空気感や見立てなどをオランダの光景や、スイスの建築家ピーター・ズントーの建築空間、さらに著者自身の作品と照らし合わせて論じる試みは挑戦的で、ここで論じられている内容は、光学現象を使う空間表現の感性的な側面を言語化する方法論を示しており、アーティスト、デザイナー、建築家にとって有用性の高いものとなっている。

ズントーが光と影によって作り出す建築空間は、その代表作を巡った著者の体験を詳細に論じられている。また、フィルメールの光を生み出した低地オランダの水面と空が作り出す光景のなかの光の効果の分析では、日々の気象データと著者が測定した光のデータを比べながら、その美しさの要因を解き明かしている。また著者が滞在制作を行ったマルタ島での光の体験が、自身の作品へのつながることを説く。そしてこうした分析の上で、著者は詳細に自身の作品を論じている。著者がヨーロッパ等で撮影した豊富な写真は、光の現象の感性に訴求する部分の理解の大きな助けとなっている。

著者は博士審査展に自然光と風を利用した巨大な光のインスタレーションを制作し、本論文で考察した空気感・見立て・自然の美しさの3つの要素の引き立てた独自の空間創出を見事に実現した。本論文は、筆者の博士審査展出展作品および過去作品のコンセプトや制作過程を詳細に語ることで、今日に至るまでの道程が明確に論じられている。この制作過程の論述の中には、著者・西毅徳のアーティスト／デザイナーとしての独創性とその研究の有用性が示されており、高い評価に値するものである。よって、博士学位に相応するものと認定する。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、建築の空気感・見立て・自然の美しさの3つの要素から引き出し、独自の空間創出を自然光と風を利用した巨大な光によって表現したインスタレーション作品である。

作者は自然の光景を実際に体験して美しいと思う多くの場合、そこには自然光による光学現象が必ず原因として存在して、それは光の反射や屈折といった、光の性質に依るもので、それらが大気の影響によ

って、劇的な美しい光景を作り出していると述べている。それらを表現しようとこれまで自然光、水、風の現象をモチーフとして多くの作品を発表してきた。

作者の転機になった作品「蜃気楼《MIRAGE CUBE》、2015年」は「建築は光の受容器となる」というある本の言葉に感銘を受け、アクリルと水を使った作品は空間そのものが光の反射や屈折の要素を持った透光不透視の新しい空間体験を作り出し高い評価を得た。ここから彼の空間表現のさらなる追及が始まり、東京藝術大学大学院に入学してからは大学構内で自然光が降り注ぐひらけた場として展望デッキを作品発表の場と定め、環境や建築を意識した東京藝術大学大学院修了作品「月の道《SKY PATH》、2018年」では透明三角アクリルロッドを無数につなげ面材を光の受光器として、それを通して鑑賞者に作者の考える美しい光景を提示した。また、海外留学の際の研究作品では光を受ける造形物により、その場の言葉に出来ない建築の空気感を体験させる作品が出来た。

これらの作品群から総合的に学んだことを複合的に表現した作品として本作品は位置付けられる。光や制作を重ねてきた大学の展望デッキを作品発表の場としたことで、感覚的につかんできた環境をさらに緻密に分析を行う（日々の気象データと著者が測定した光のデータ、建築のスケールなどの分析）ことができ、それらのデータをもとに展望デッキに最大限使い収まる構築物の設計を行うことができた。さらに風を受け動く受光体の設計と模型による検証を繰り返し、レンズの選択と空間の関係で光を効果的に床まで落とすためのサイズを検証し最適な大きさと形状を導き出した。構築物の形も奥行きを効果的に感じさせるために天井の形が2箇所折れ曲がる形状としたことで建築の3次曲面のような面形状を生み出し、内部空間が単調にならず、さらに壁を構成する縦に連なり立てた板材の隙間の光もあいまって自然に人を誘導する効果となった。それにより構造的な強度も増した。床も美しく受光するために左官で薄塗りの平滑な一つの面として表現したことは作者の執念を感じた。さらに壁の色も表と裏では着色を変えるなど周到で作者の緻密さと高い設計力と修正力がうかがえた。しかし、この作品を見たものはそのような細かなことよりも光が風によって光が揺らめく様に感動し奥の空間へ誘われ、この空間にいつまでもいて瞑想したいような感覚を与えてくれることが先にくる。それは多くのアーティスト、デザイナー、建築家がいつも目指していることであるがなかなか出来ないことであり本作品が特に秀でた作品であることと言える。これらは作者・西毅徳のアーティスト/デザイナーとしての独創性とその研究の有用性を示すものであり、高い評価に値するものである。よって、博士学位に相応するものと認定する。

(総合審査結果の要旨)

西毅徳君の研究作品「Ripple」は、総合工房棟3階展望デッキに設置された。設置というよりは場に共生した、とでも言うべきだろうか。展望デッキのサイズ、形状、場所、光、風を見事に操り、そこでなければ表現出来ない世界を、作品を通して見事に具現化することに成功した。

論文審査会は彼の作品内でおこなわれた。当初、作品は鑑賞のみ、論文審査会は同フロアにあるデザイン科プレゼンルームでおこなう予定であった。当日彼から「光と風のタイミングが良いので作品内で空気感を味わいながらの審査会をおこないたい」との要望を受け、急遽作品内で開催。その様子はこれまで見たことのない、作品に、また審査会に新しい空気を予感させるものであった。主査、副査、教員、来場者の方は地べたに座り、目の前の光の現象や空間の空気を感じながら、本人からの作品解説を受けた。その時の状況はまるで、古美術研究旅行での各所見学した時に感じた気持ちよさ、緊張感があり、彼が求めている、その場所に居るから始めて体感することの出来る作品に仕上がっていたのだと思う。

近年インターネットやテクノロジーの進化により、世界中の人々が常に場所を問わず繋がり合うことが出来る状況にある。買い物もインターネット上で済ませ、いろいろな体験を、インターネットを通してあたかも実体験しているかのような錯覚に陥る。場所の必要性がうすれているようにも感じ取れるが、しかし彼の作品を見ていると、その場所だからこそあり得る光景、映像では伝わらない光景というものがあり、人間にとってそれはとても贅沢でありながらも、あたりまえに必要な時間なのだと気づく。

作品「Ripple」は、光、風の数多くの調査、光にまつわる世界各国の建築のサーチ、海外での光の作品制作等、実践を伴った様々な経験の上に成り立つ。それらは、博士論文「光が織りなす現象と空気感 - Phenomena of Light and Atmosphere -」の中に、詳細な記載がある。まさに、博士論文と研究作品がひとつとなり、自身の世界観を表現しているところが見事である。

東京藝術大学の博士として、これからの彼の活躍に期待が持て、今後がとても楽しみである。
課程博士学位の総合審査結果として、彼を博士学位に相応するものと認定する。